

日本舞踊の表現と手話

—「体話」への試み—

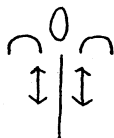
長崎 由利子

〈目的〉

日本舞踊中に手話を使用する方法はすでに相当の成果を得ている。そこで本発表では、日本舞踊中に手話を入れる発想から一歩踏み出し、手話の中に日本舞踊が持つ芸能としての手法を導入してより豊かな新しい手話表現の一例を試作する。

〈方法〉

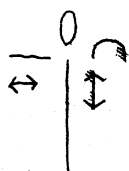
- ① 試作対象となる言葉として任意に「雨」を選択し、その手話表現を把握する、(他に「秋」「桜」等)



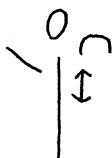
- ② 「雨」は、日本舞踊曲の「雨の五郎」(雨の降る夜も雪の日も…・五郎が春雨の中化粧坂に通ってくる場面)、「助六」(濡れに廊の夜の雨…・助六の出の場面)、「雁金」(濡れて嬉しき朝の雨…・濡れて夢を結んだことと朝の雨を掛けた場面)、「年増」(雨に嬉しき朝直し…・旦那との一夜が明けた場面)、「夕立」(またひとしきり降る雨に…・再び雨になり恐がる場面)等の詞章中に入っており、該当部分の振付を見てみると、「五郎」は、濡れたかどうか確かめる・「助六」は雨を受ける・「雁金」は袖で顔を隠す・「年増」と「夕立」は袖で雨を払うという型になっている。
- ③ 同じ「雨」を表現するにあたり、手話では当然のことながら両手を広げて顔前左右におき指先を下に向けて二度おろすという生活に即した明解な動作であるが、日本舞踊では「雨」を即物的に表現するのではなく、雨を受ける・よけるという動作が多く「雁金」・「年増」のように情事を象徴する場合もあり、「雨の五郎」・「助六」等は小道具として笠を使用して雨のイメージを与えている。
- ④ ①～③を踏まえて、手話本来の実用性を失わずに、日本舞踊の優雅な動きを導入した新しい「雨」の表現に向けて試作していく

〈試作〉

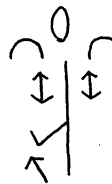
- A <雨に濡れた>状態をあらわす
左手「雨」の手話、右手左右に払う



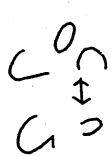
- B <雨がやんだ>状態をあらわす
左手「雨」の手話、右手手のひら上にして受ける型、右上の空を見上げる



- C <嬉しい雨>
立つ、両手「雨」の手話、右足上げる



- D <困った雨>
立つ、両手「雨」の手話、右足をばらせる



- E <情事を連想させる雨>
右立て仮座り、左手「雨」の手話、右手胸に当てる

〈結果〉

試作は、全て手話による「雨」の表現を使用しつつ、もう一方の手で払う・受けるの動作や、立って足を上げたりすべりをすることで、単に「雨」だけを表現するのではなく「雨に濡れる」<嬉しい雨>「情事を連想させる雨」等を表現できる。本来手話で「雨に濡れた」<嬉しい雨>を表現する場合は、「雨」の他の手話を続けてしなければならない。しかし、聴覚障害者の重要な意思伝達手段である手話の動作に、日本舞踊の基本的な振付を導入することで「雨」に付随した諸々の状況までも一つの手話で表現可能となり、芸能の優雅さまで加えられるのである。一方、日本舞踊の側に立つと、芸能としての美を追求するだけでは無く、聴覚障害者の「声」を応援する人間愛的役割を担うことになる。舞(まい)による声、言わば「舞 VOICE」の誕生である、したがって、芸能(日本舞踊)と伝達(手話)の融合による新しい手話の出発点となり得ると思う。また、日本舞踊で「雨」を象徴する小道具として傘を用いる点から、聴覚障害者が手話表現の補助手段として傘・扇子・手ぬぐい等を利用することも有効である。さらに、扇子や手ぬぐいで手紙・させる・とっくり・鏡・暖簾等を表現する日本舞踊の「見立て」の手法を手話に導入してみてもどうか。

〈考察〉

芸能と伝達の融合による「舞 VOICE」は、聴覚障害者の「声」をより豊かにする。とくに、立って足を上げる・すべる等の動作を加えることで、手だけの手話から身体全体で「声」を出す「体話(たいわ)」を実現する一歩になればと思う。